The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ディキンソンの『中国人からの手紙』（1901）とアジアでのその受容
Author(s)	橋本，順光
Citation	待兼山論叢．文学篇．2014，48，p．1-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56593
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ディキンソンの『中国人からの手紙』（1901）とアジアでのその受容[1)]

橋 本　順 光

Keywords：Orientalism / Pan-Asianism / Rabindranath Tagore / Kakuzo Okakura / Gu Hongming

作家・吉田健一は、祖父「牧野さんに次いで一生のうちで二番目に会った友達」として、ケンブリッジのキングス・カレッジのフェローであったゴールズワージー・ロウズ・ディキンソン（1862-1932）を挙げている。この日本でほぼ無名の、英国であっても知る人ぞ知る存在だった書物の著者に、吉田が『交遊録』（1974）の一章を割いたのは、ただ親しかったからだけではない。立場や主張が違えど、そしてたとえ自分の著書を読んでいないような年下の者であっても、真理や知を愛する者を同好の士として対等に扱うディキンソンに、「知識階級の人間というものが実際にいることが解った」と実感したからである。[2)] 祖父・牧野信顕より一年ばかり若い五十年も年上のフェローと吉田はケンブリッジで親しく交わり、「碩学」として尊敬し師事したわけだが、あえて師ではなく「友達」と書いたのはそれゆえのことなのだろう。

日本からの紹介状を携えた吉田がディキンソンに会ったのは、大学入学まもない 1930 年の秋のことである。その際、吉田はディキンソンの *Letters from a Chinese Official*（1903）も持参し、署名をもらったという。その著書について、吉田は以下のように記している。

これは今日の見方からすれば当り前なことを書いたもののようであって

> も支那が義和団の事件が列強の介入でやっと収ったばかりの野蛮国だというのがその頃は当り前な見方だった時にディッキンソンは（中略）この小冊子で支那に対する一般の考えの誤りを指摘し、これを改めなければ早晩生じる事態として今日の支那で現に起っている通りのことを予告している。（中略）一部ではこれが実際に支那人が書いたものと思われてブライアンというアメリカの政治家はその批評でこの本を書いたものがキリスト教徒の家庭に育たなかったことは明白であると言い、その非キリスト教的な論旨を攻撃したそうである。又そうした誤解は別としてもこの本が出た時は相当な注意を惹いたものに違いない。[3)]

ただ「実際に支那人が書いた」と誤解したのは、ブライアンだけではなく、インドの詩人タゴールや、天心こと岡倉覚三も含まれていた。吉田がいうように、本書は、刊行当時、意外な影響を及ぼしたのである。

この吉田が持参した *Letters from a Chinese Official*（1903）は本文の異同がほとんどないアメリカ版で、元の英国版は前々年に *Letters from John Chinaman*（1901）として出版されている。このなかでディキンソンは、中国人の書簡という設定で、文明化の名の下に行われた西洋列強の野蛮行為を批判し、中国を農本主義的なユートピアとして描いた。自給自足しているがゆえに、中国には西洋文明とは異なる文明があり、そこから欧米の工業化や「金銭だけの結びつき（cash nexus）」に疑問を呈したのである。モンテスキューの『ペルシャ人からの手紙』（1721）やゴールドスミスの『世界市民』（1760）といった、東洋の賢人がヨーロッパを批判する啓蒙主義以来の伝統に連なっていることはいうまでもない。

事実、その警鐘は功を奏した。ジョージ・マコーレー・トレヴェリアンといった有名な歴史家が、いち早く『十九世紀』で長文の書評を発表し、この書物は広く英国で知られるようになったのである。トレヴェリアンは、義和団事件は「黄禍」といったような黄色人種の脅威ではなく、白色人種がもたらしている「白禍」ではないかと述べた。ディキンソンは白禍と記さなかっ

たが、なるほど巧みな要約といえよう。[4)]

しかし、こうした異国人の視点を利用した自己批判が、はるか自国の枠を超えて流布してしまうこと、つまり、それだけ異国が遠い存在ではなくなってしまったことは、18 世紀と大きく異なる点といわねばなるまい。英国での刊行タイトル『ジョン・チャイナマンからの手紙』が、米国では『中国の役人からの手紙』と変更された一点をとっても、そんな事態の変化が読み取れる。ジョン・チャイナマンとは中国人一般を指す侮蔑的な言葉だが、英国では中国人一般という意味であっても、中国からの移民や住人が多い米国においては、政府高官と書かなければ何の変哲もない日常的なやりとりと誤解される恐れがあったのである。と同時に、新渡戸稲造の『武士道』（1900）がその好例だが、当時から東洋の知識人たちが英語で書物を刊行するようになり、これらの書簡が本物と誤解されるような素地も整っていた。18 世紀の中国趣味あふれる陶器や図像に見られるような、無言で首をふるだけの清朝政府高官（nodding mandarin）というのは、遠い過去のものになっていたのである。

ではディキンソンは、どのような文脈から、中国人という設定を用いたのか。そもそも彼の原点はプラトン哲学だった。ケンブリッジ大学のフェローとして、ヴィクトリア朝的価値観から距離を置くことができたディキンソンは、異教趣味と平和主義に抵抗なく接近していた。一躍、彼の名を知らしめた『ギリシア人の人生観（*Greek View of Life*）』（1896）は、近代西欧が失った世界を生き生きと甦らせた古典的な著作であるが、[5)] その死生観の説明からも、根底には秘教的な関心がうかがえる。実際、ディキンソン自身、「私がプラトン哲学に魅かれたのは、秘教的仏教（Esoteric Buddhism）と呼ばれる例の興味深い詐欺だった」と、自伝で述べているのである。

この秘教的仏教は、1875 年にアメリカでブラヴァツキー夫人とオルコット大佐が創設した神智学協会の代名詞だった。東西の宗教や哲学を総合する叡智が太古の文書に隠されており、それを秘教的仏教と呼んだのである。オルコットは、講演旅行で 1884 年にケンブリッジの心霊現象研究協会を訪れ

ており、ディキンソンはそこでの講演に出席している。それによれば、以前、オルコットの部屋に突如、「マハトマ」が出現し、消え去った時に証拠としてターバンを残していったという。ご丁寧にもそのターバンは出席者に回覧されたそうだが、それでも当時のディキンソンは講演を疑うことなく、「真理へと通じる超越的かつ神秘的な道」があることをプラトンと秘教的仏教によって教えられたと回顧している。[6)] なおケンブリッジの心霊現象研究協会は、同じ年にリチャード・ホジソンをインドの神智学協会へ送り、オルコットが述べたような神秘的な現象がトリックであることを翌年の報告書で指摘することになる。ディキンソンが「詐欺」と呼んだのはこのことを指している。

しかし、詐欺が詐欺でも「興味深い」と記すように、ディキンソンが想像上の人物による語りや座談の書を好んで書いたのは、神智学に魅かれた過去と無関係ではあるまい。むろん『モダン・シンポジアム』（1905）のように、プラトンの『饗宴』を第一に踏襲しているのは明らかだ。ただ、突如、現代に召喚されたプラトンが若者と対話を繰り広げるという『二千年後』（1930）などのように、そこには交霊会による死者との対話を連想させずにはおかない。

いずれにせよ、ディキンソンにとって中国は、古代ギリシア同様に、近代西欧の文明とその価値観を相対化する点で共通している。事実、18 世紀のヨーロッパにおいて、中国は古代ギリシアとの共通点が指摘され、科挙制度ゆえにプラトンの哲人政治に比定されることがあった。以下のように、ディキンソンが描く中国は、近代の欧州を批判するために理想化された中国像をほぼそのまま継承している。

> 健やかな労働、十分な余暇、わけへだてのない歓待、野心に邪魔されず生まれついた習慣に満足して求め過ぎない心、世界屈指の自然にはぐくまれた美意識、いまだ芸術として洗練されていなものを優美で気品あふれる姿で表現する力、私［ジョン・チャイナマン］が生まれた人々の特

徴は、こんなふうに列挙できます。[7)]

こうした中国像の源泉として、ディキンソンはハーバート・アレン・ジャイルズの『中国文学精華（*Gems of Chinese Literature*）』（1884）やウジェーヌ・シモンの『中国の都市（*La Cité Chinoise*）』（1885）を参照したという。親友のE・M・フォースターによれば、ついに「私は、前世、中国人だった」とまで述べるほど中国を敬愛したのであった。[8)]

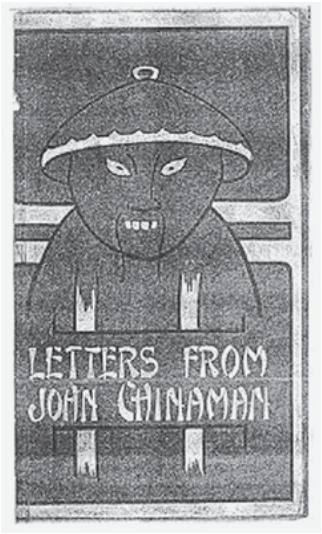

図1　G・K・チェスタトンによる初版の表紙

それゆえ、歯をむきだしにした中国高官が悪意に満ちた筆致で描かれた初版の表紙を、ディキンソンは嫌った（図1）。初版以降に使用しなかったため稀覯本となり、この無署名の稚拙な絵はなかなか知られることがなくなったが、ディキンソンによれば、それは美術学校出身であった作家のG・K・チェスタトンがデザインしたという。[9)] 早くも露わになった両者の衝突は、後にチェスタトンの『異端者の群れ』（1905）において繰り返されることになる。そこでチェスタトンはディキンソンの異教趣味と平和思想を手厳しく批判したのだが、『中国人からの手紙』については一言もない。

このようにディキンソンが中国に親近感を抱いたのは、彼の前世といった生まれつきによるものではもちろんなく、環境によるところが大きい。そもそも西欧文明の批判に際して中国人の設定を勧めたのは、フォースターによれば、ディキンソンの親友で「私が最初に愛した人」[10)] でもあった高名な美術評論家ロジャー・フライだった。当初、ディキンソンは、『ガリヴァー旅行記』に登場する理性ある馬の種族フウイヌムを使ってヨーロッパ批判の手紙を書こうとしていたが、設定が不十分と感じていた。従って1902年に、

‘Haji Mirza Ali Asghar Kirmanshahi’ という名の、出身地は特定されていないがおそらく西アジアか南アジアから来た留学生が、英国を眺めたという風刺の手紙を寄稿したのは、その頃の試作なのだろう。[11] 直接的な影響はともかく、後にフライは、ケンブリッジやブルームズベリー・グループを中心にして中国美術再評価の立役者となる。人脈を同じくするディキンソンの中国文化への敬意もまた、同じ中国熱を共有するものといって差し支えないだろう。[12]

中国人の立場から書いた書簡というのはよく知られた伝統であるため、ディキンソン自身はおよそ読者をだますという意図はなかったと記している。[13] しかし、前述のように東洋人による書籍刊行が珍しくない当時にあって、書籍中にディキンソンの名がなくては、中国人の著作と受け取られてもやむを得ないところがあった。初出も紛らわしい形で掲載されていた。1901年の1月から2月にかけて、『サタデー・レヴュー』誌にて、編集長宛に寄せられた匿名の中国人による投書として掲載されたのである。そのため同誌には、これらの書簡は中国について基本的な間違いが多く、それゆえ中国人が書いたものではないという、反論の投書が2月23日号に掲載された。その投書を書いたR・S・ガンドレーは、英国の商社を代表して中国政府と長く交渉に関わった経歴があり、中国の戦争では「略奪、放火、そして虐殺」が日常であって、到底、「アルカディアなどではない」と批判したのである。

同様の反論が、冒頭で吉田も言及したブライアンによって引き起こされた。改訂増補された書簡が米国で刊行され、民主党の大統領候補、ウィリアム・ジェニングス・ブライアンが、『中国人への手紙』（1906）を刊行したのである。ブライアンは、進化論裁判として知られる1925年のスコープス裁判にて検察側代表として進化論を攻撃したことも手伝ってか、吉田やフォースターなど、これまで多くの人々がブライアンの不明について皮肉をこめて言及してきた。しかし、繰り返すように、そのように誤解しても不思議ではない状況であったことは確認しておかなければならない。例えば、当時、駐米していた清国公使の伍廷芳は、義和団事件に際して複数の英語論文

を寄稿しており、ブライアンは、『中国人からの手紙』を伍廷芳の著作と勘違いした可能性が高い。一方、当のディキンソンは、ブライアンの誤解をあてこすることなく、アメリカの読者に向けて一文を寄稿した。東西のどちらの文明が優越しているかはともかくとして、「西洋人として、西洋の理想に共感しつつ」、実際に「西洋の行ってきたこと」については批判的な立場をとりたいと明言したのである。[14] 吉田も記すように、書簡の著者はキリスト教徒の家庭を知らないという決めつけに対して、「私はそういう家庭に生れて育ったのです、などという野暮な再論はしなかった」のである。吉田の要約に従えば「野蛮と文明の話」といえるかもしれない。[15]

一方、ブライアンに答えるかのように伍廷芳は『東洋の外交官から見たアメリカ（*America through the Spectacles of an Oriental Diplomat*）』（1914）を刊行する。その中で伍は、アメリカやオーストラリアでの排中移民法の矛盾を、アニー・ベサントの演説を引いて批判した。このベサントこそ、ブラヴァツキーやオルコットの跡を継いで、1907年から神智学協会の会長となった女性である。協会本部がインドにあり、インド自治運動に関与していたことからも、伍はその著作を引用したのだろう。同時に、伍は滞米時に神智学に深く魅かれるようになっていた。ディキンソンが『中国人への手紙』を書く遠因となった神智学を通じ、伍は死者との会話という交霊に深い興味を示すようになったのである。[16]

伍廷芳は英国に論考を寄稿することはなかったが、英国ではすでに曽国藩の息子の曽紀沢が、「中国－その眠りと覚醒（China: the Sleep and the Awakening）」を『アジアティック・クォータリー・レヴュー』の1887年1月号に掲載し、欧州に派遣されていた外交官ということもあって各種評論で注目されることになった。英国領ペナンで生まれ、エディンバラで学んだ辜鴻銘（Gu Hongming）も、Kaw Hong Bengの表記で、『オーヴァーランド・マンスリー』の1890年5月号に「中国の教育と西洋の科学（Chinese Education and Western Science）」を発表し、いわゆる中体西用論を展開している。この雑誌は米国の発行だが、論文自体は、孫文が1892年に卒業

することになる香港西医書院の学生に向けて書かれたものである。『中国人からの手紙』と同時期においても、辜鴻銘と同じくペナン出身の林文慶（Lim Boon Keng）が、Wen Chingの表記で、『中国内側からの危機（*Chinese Crisis from Within*）』（1901）を刊行している。シンガポールの英国臣民として林は、中国に対する英国の文明化が矛盾そのものであることを指摘し、義和団事件にまつわる一連の出来事は、「黄禍」ではなく「白禍」にほかならないと批判したのである。奇しくもトレヴェリアンによるディキンソンの書評と同じ表現が使用されたわけだが、ホブソンが1905年版の『帝国主義』において引用したほかは、あまり反響を呼ばなかったので、おそらくは偶然の一致かと思われる。[17)]

特記すべきは辜鴻銘であろう。義和団事件に際し、彼は今度はKu Hung-Mingの表記で『尊王篇』（1901）という漢字の題目を持つ英文の書籍を出版する。東西文明調和の必要性が強調されるのは先の論考と同じだが、予断を許さない将来への警告が新たに付加されている。「現下の外国勢力による政策は、中国を追い込み、暴走させることになるかもしれ」ず、これまで文治を旨としてきた中国が、列強の武断政治に参加すれば今後の文明の行方は大きく左右されるだろうと注記するのである。[18)] これはディキンソンの以下の記述と呼応するものであろう。

> これ以上の皮肉があるでしょうか。キリスト教国が我が国を訪れ、剣と焔をもって教えたのは、正義というものは力なくしては無力でしかないということだったのです。我々がこの教えから学ぶはずがないとは思わないでください。中国の学びは欧州に憂いをもたらすでしょう。あなたたちは四億の民を武装させているのです。あなたたちが来るまで、私たちは自分たちや世界と平和裏に暮らすことしか望んでいませんでした。そこへあなたたちはキリストの名において武器を取れと叫んでやってきました。わたしたちは孔子の名において、それに答えるでしょう。[19)]

上記のような共通点ゆえに、ディキンソンは辜鴻銘を参考にして『中国人からの手紙』を書いたのではないかという指摘があるが、[20]『中国人からの手紙』の第一書簡は 1901 年 1 月と辜鴻銘に先んじて刊行されており、単行本化に際しても儒教や中国社会について依然として誤解が多く、また上海で出版された書籍をすぐに参照したというのも考えにくい。ディキンソン自身、後に辜鴻銘に面会した時、『中国人からの手紙』はシモンの『中国の都市』から着想したと述べたというのも、そうした偶然の一致を強調してのことだろう。[21] ただディキンソンが鍾愛したジャイルズの『中国文学精華』には、辜鴻銘こと‘Mr. Kaw Hong-beng’への謝辞があるように、そもそもジャイルズと辜鴻銘は友人であった。[22] 表記が異なっていたこともあり、ディキンソンは自分が影響を受けた書物に辜鴻銘が関わっていたことに気づかず、おそらく辜鴻銘も知らなかったと思しい。辜鴻銘は、芥川龍之介やサマセット・モーム、タゴールなど多くの作家やジャーナリストが面会を求める弁髪姿の「遺臣」として敬愛されることになるが、英語が堪能な、しかし、西洋文明には批判的な辜の姿に、例えばタゴールなどディキンソンの夢想した「中国人」が体現されていると思ったであろうことは、想像に難くない。

というのも、この高名な詩人タゴールこそ、ディキンソンの『中国人からの手紙』に感銘し、インドでの紹介に努めた第一人者であったからである。義和団事件についてタゴールは「社会の差異（Samajbhed）」（1901）という一文で、文明化を担うはずの列強が中国で行った弾圧を批判していた。したがって、科学者のジャガディッシュ・チャンドラ・ボースから『中国人からの手紙』を送られた時、タゴールはまさに彼が望んでいた中国内部からの批判の声と信じて飛びついた。「中国人からの手紙（Chinamaner Chithi）」（1902）という長文の書評で内容を詳しく紹介したのである。ブライアンと違い、タゴールの書評で重要な点は、「アジアの多様な人々の間には実に深く大きな統一性があることがこの本からわかった」と記すように、インドのみならず東洋には共通する精神があり、それは西洋の文明に優越すると強調したところであろう。[23]

当時、タゴールの元でインド滞在中の岡倉覚三も同じ認識を共有し、かつ強固なものへと発展させていったと思しい。その証左が、ボース、タゴール、岡倉らの共通の友人であり、後に岡倉の英文著作『東洋の理想』（1903）に協力し、序文を執筆した通称ニーヴェディータこと、アイルランド出身のマーガレット・ノーブルの書簡に見受けられる。岡倉をインド旅行へと誘い、ヴィーヴェカナンダと結び付けたのはアメリカのジョセフィン・マクラウドであるが、彼女はニーヴェディータと同じくヴィーヴェカナンダの教えに帰依しており、二人は頻繁に手紙をやりとりしていた。[24] 文中でニーヴェディータは共通の知人の岡倉を「ニグ」という愛称でしばしば言及しており、その一つ、1902年7月2日付けの手紙で、以下のようにマクラウドに報告している。

> 私たち［おそらくボース、タゴール、岡倉］は、ジョン・チャイナマンが英国人かもしれないと知って失意に沈んでいます。特にニグはジョン・チャイナマンについてずいぶん書いていましたからね。五章のうち、もう三章も書いてしまっていたんですよ。[25]

時期と内容から考えて、ここはディキンソンの『中国人からの手紙』を指すとみて間違いあるまい。残念ながら、岡倉が執筆した草稿の詳細は不明であり、管見の限り、岡倉の著作で『中国人からの手紙』に言及したものはない。しかし、岡倉がインドから帰国して後に刊行し、ボースにも言及のある『東洋の理想』（1903）の冒頭の一文「アジアは一つ」は、たとえディキンソンの影響とはいえなくとも、彼の著作を媒介にして得られた実感がその起点にあったとは考えられるだろう。[26]

しかし、ディキンソン自身はこうした受容に困惑を隠せなかった。ガンディーがいつ『中国人からの手紙』を知ったのかは不明だが、1911年の書簡で、最近、再読してその有効性を再認識したことと、翻訳の慫慂を記している。[27] その話が伝わったのだろう、ガンディーがグジャラート語に翻訳

すると聞いたディキンソンは、「まったく喜ぶことはなく、彼らしいことに、あれは西洋のために書いたのであって東洋のためではないと述べた」という。[28] ちなみに日本でも 1911 年 2 月に『太陽』第 14 巻第 3 号で「白人排斥の思想」として中国人による書簡というふれこみで抄訳があり、それを参照した「聳動欧人之名論」が1912年の『東方雑誌』8巻1号に掲載されている。[29]

このように『中国人からの手紙』が、インドや中国、日本で中国人の手になるものとして読まれていた 1912 年から翌年にかけて、ディキンソンはこれら三つの国を初めて訪問する機会を得る。東西の知識人の対話と理解を奨励するフランスの銀行家アルベール・カーンの基金から助成を得たのである。その報告書も兼ねて 1914 年に刊行された旅行記からは、精力的に現地を回り、人々と対話を重ねた姿が如実に浮かび上がる。ありていにいってインドと日本には失望を隠せなかったが、中国はディキンソンの期待を裏切ることがなかった。孫文とは少ししか会えなかったようだが、孔子の末裔に面会して『中国人からの手紙』を手渡すなど、永く憧憬していた世界が今も息づき、そのまま残されていることを興奮した筆致で旅行記や友人への手紙に書き記している。[30]

日本については、新渡戸の『武士道』を参照して古代ギリシアとの共通点を指摘しつつ、西洋化によってそれらが失われようとしていることを惜しむといった、やや類型的な記述を繰り返している。[31] ここで特記すべきは死の一か月前の岡倉と面会していることであろう。1913 年 7 月 14 日付の書簡でディキンソンは、岡倉の知人であったロジャー・フライの紹介状とともに面会を申し込み、理由をこう説明している。

> 私は貴兄のご著書を拝見致し、心からなる共感を覚えたからであります。貴兄は『中国官吏からの書簡』と題する私の小著を或いはご覧になったかもしれませんが、もしご覧になっていれば、ある程度私のことをご推察頂ける紹介状の役を果たすものと考えております。[32]

この岡倉の著作は、おそらく『茶の本』だろう。インドの詩人プリヤンバダ・デーヴィーから岡倉に宛てた6月13日付の書簡に、カルカッタでディキンソンと『茶の本』について話していたという報告があるからだ。この時、岡倉はすでに病に苦しんでいたが、かつてインドでタゴールらと読み、そして議論したであろう書物の著者と、8月5日に東京へ出向いた際に面会したと思われる。詳細は不明だが、プリヤンバダ宛の手紙に「ちょっとの間だけ、ディキンソンに会いました－幾分好感を持ちました」と記しており、[33] 岡倉はディキンソンに東洋人を騙るような悪意はなく、二人はむしろ西洋文明とは異なるあり方を模索するという点で共通点があったことをひょっとして確認したのかもしれない。

ただ東洋旅行でディキンソンが出した結論は、アジアは一つなどではなく、「よく東西と対比されるような意味での東洋はけっして統一体ではない」というものだった。[34] 近代の西洋が一体なのに対して、中国とインドがまったく異なるように東洋はばらばらなうえ、西洋化の趨勢は変えがたく、個々の文化もまさに失われようとしていると指摘したのである。ディキンソンのインドでの幻滅を含め、この指摘はタゴールをいたく失望させた。[35] となると、タゴールが1916年に来日した際、岡倉の贈った道士の帽子を被っていたという逸話の底には、[36] 日本のナショナリズムと物質主義を批判しつつ、中国とインドとの紐帯と価値観を強調しようとしたタゴールの戦略があったのかもしれない。

図2　徐志摩から贈られたという愛用の中国帽をかぶるディキンソン

その後、第一次世界大戦を経て、ディキンソンは国際連盟といった、いわば文明間の調和のための設立運動に深く関わるようになる。[37] 東洋というもう一つの文明ではなく、東洋出身の人々との調和や共存が主

題になったともいえるだろう。吉田のような留学生を対等に扱ったのもそのあらわれと考えられる。1920年から1922年にかけてケンブリッジで学んだ中国の詩人である徐志摩もその一人で、帰国する徐がディキンソンに贈ったという中国帽はその後のディキンソンのシンボルとなり（図2）、[38] 吉田も「ケンブリッヂの大学生」や、そのころを描いた初期小説「過去」（1944）などで書き留めている。

しかし、ディキンソンが『中国人からの手紙』で予見したような文明の衝突は、1920年代以降、ますます現実味を帯びるようになっていた。1927年、中国政府高官が書いた書物の翻訳という『一中国人の西洋と中国への意見（*A Chinaman's Opinion of Us and of His Own Country*）』をディキンソンは書評して、「黒髪の人種は統一されねばならない」から始まる一節を引きながら、西洋の科学を学んだ中国が西洋と衝突することを憂慮した。[39] この書物は実は翻訳ではなくオーストラリアのT・J・トゥリア（Tourrier）の著作であったので、皮肉にもディキンソンはブライアンと同じ誤解を繰り返したことになる。[40] ただ義和団事件の頃と異なるのは、武力衝突がありうべき現実とされていることであろう。

事実、ディキンソンは、かつての予言が実行されているかのような事態を晩年になって目にすることになる。例えば「満州事変が何と言ってもディッキンソンにとって打撃だったことはその手紙の調子からも解った」と吉田は特記している。つまり、「ディッキンソンが十九世紀末に支那に就て書いた本で予告したことが思い掛けない所で実現し始めた」からにほかならない。[41] それだけに『中国人からの手紙』は、吉田もいうように「今日の見方からすれば当り前なことを書いたもの」として急速に忘れ去られたともいえよう。しかし、この著作の重要性は予見の正確さや東洋への影響のみにあるわけではないだろう。ディキンソンも述べたように、文明の波が世界を覆う時代にこそ、その理想とのへだたりと、もう一つのあり方を模索する試み、そしてその試行錯誤の軌跡を辿ることは、むしろ求められていると考えられるからである。

［注］

1） 本稿は、科研の基盤研究（C）「世紀転換期の英国における黄禍論とその図像に関する比較文学的研究」による成果の一部として、2013 年 7 月 20 日に国際比較文学会世界大会（ICLA, Paris IV）にて発表した‘A Modern Symposium? Goldsworthy Lowes Dickinson and Letters from and to a Chinese Official’を改訂したものであり、一部重複している。

2） 吉田健一「G・ロウェス・ディッキンソン」『吉田健一著作集』22 巻、集英社、p.25 および p.28. 吉田はすでに「ケンブリッヂの大学生」（1950）においても、「キングスが、知性というものを尊重するコレッヂだということになっていたのは、又事実、そうだったのは、ディッキンソンのような人物が、その学生生活の中心となっていたからだと思う」と特記している。『吉田健一著作集』補巻 1、p.21. 以降、引用にあたっては旧字・旧仮名遣いを改めた。なおディキンソンとの交遊については長谷川郁夫の『吉田健一』（新潮社、2014）にも詳しいが、『中国人からの手紙』については十分ではない。

3） 吉田健一『吉田健一著作集』22 巻、pp.27-28.

4） G. M. Trevelyan, ‘The White Peril’, *Nineteenth Century*, 50 (December 1901), pp.1043-1055. トレヴェリアンとディキンソンはともに「ケンブリッジ使徒会」と呼ばれる知識人の結社団体に所属しており、この一年後、二人は 1911 年まで *Independent Review* の創刊と編集に関わる。同誌は、帝国主義や国内問題に冷静な分析と批判を展開し、ディキンソンも多く寄稿した。W.C. Lubenow, *The Cambridge Apostles, 1820-1914: Liberalism, Imagination, and Friendship in British Intellectual and Professional Life* (Cambridge: Cambridge University Press, 1998), p.216.

5） なお「ケンブリッヂの大学生」にて吉田健一が、ディキンソンは「プラトン哲学の権威でもあり、題は忘れたが、彼のギリシア文化に関する著述は、一種の古典となっている」と記しているのは、この著作のことだろう。『吉田健一著作集』補巻 1、p.21.

6） *The Autobiography of G. Lowes Dickinson* (London: Duckworth, 1973), p.67.

7） Anonymous [Dickinson], *Letters from John Chinaman* (London: R. Brimley Johnson, 1901), p. 21.

8） E. M. Forster, *Goldsworthy Lowes Dickinson* (New York: Harcourt, Brace, 1934), p. 142.

9） Dickinson, *Autobiography*, p.165.

10） Dickinson, *Autobiography*, p.85.

11） ‘As Others See Us’, *Cambridge Review*, April 24, 1902, pp. 265–267.

12） こうした文脈については、以下を参照。Hsiu-ling Lin, ‘Reconciling Bloomsbury’s

Aesthetics of Formalism with the Politics of Anti-Imperialism: Roger Fry's and Clive Bell's Interpretations of Chinese Art', *Concentric: Literary and Cultural Studies*, 27 (2001), pp.149-191; Patricia Laurence, *Lily Briscoe's Chinese Eyes: Bloomsbury, Modernism, and China* (Columbia, S.C.: University of South Carolina Press, 2003).

13） Dickinson, *Autobiography*, p.165.

14） Dickinson, 'Eastern and Western Ideals: Being a Rejoinder to William Jennings Bryan', *Century Magazine*, December 1906, p.316.

15）「野蛮と文明に就て」『吉田健一著作集』補巻 1、p.228.　ただディキンソンのアメリカへの一文を指してのことかどうかは不明である。

16） 伍と神智学の関係の重要性については、以下の拙稿を参照。「アイルランド神智学徒のアジア主義？　ジェイムズ・カズンズの日本滞在とその余波」藤田治彦（編）『アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究－日英間に広がる 21 世紀の地平－』（大阪大学大学院文学研究科、2013), pp.27-43.

17） 詳しくは *Yellow Peril, a Collection of Historical Sources*(Tokyo: Edition Synapse, 2012）の復刻資料と所収の拙稿を参照。

18） Ku Hung-Ming, *Papers from a Viceroy's Yamen: a Chinese Plea for the Cause of Good Government and True Civilization in China* (Shanghai: Shanghai Mercury, 1901), p.79.

19） Dickinson, *Letters from John Chinaman*, p. 55.

20） Lydia H. Liu, 'Desire and Sovereign Thinking' in Pheng Cheah, Jonathan Culler (eds.), *Grounds of Comparison: Around the Work of Benedict Anderson* (London: Routledge, 2013), p. 220. note 10.

21） Ku Hung-Ming, *The Spirit of the Chinese People* (Peking: Peking Daily News, 1915), p.3.

22） Herbert A. Giles, *Gems of Chinese Literature* (London: Bernard Quaritch, 1884), p. x.

23） Stephen N. Hay, *Asian Ideas of East and West: Tagore and his Critics in Japan, China, and India* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1970), p. 34.

24） 詳細は稲賀繁美『絵画の臨界』（名古屋大学出版会、2014）第 II 部第 2 章「『東洋の理想』と二人の女性 —— ジョセフィン・マクラウドとシスター・ニヴェディタ」を参照。

25） Sankari Prasad Basu (ed.), *Letters of Sister Nivedita*, vol. 1 (Calcutta: Nababharat Publishers, 1982), p. 476. この典拠をご教示いただいた村井則子氏に感謝する。

26） ほかにも『茶の本』（1906）において岡倉が「黄禍」に対して「白禍（White Disaster）」を強調し、東洋の 'Teaism'という精神性を強調する点にも、共通点は見出せよう。

27） *Collected Works of Mahatma Gandhi*, vol. 11, p. 134.

28） Forster, *Goldsworthy Lowes Dickinson*, p.144.

29） 橋川文三も、ディキンソンの著作と気づかずに論究し、書誌の指摘があった読者

からの投書を掲載している。『黄禍物語』（岩波書店、2000）、pp.107-114, pp.125-126. 段落の切り方などから『東方雑誌』は『太陽』を参照した可能性が高いと推定しているが、両者の原文を比較した荘千慧氏によると、『太陽』を参照して同じ訳語を使用したのは確実だが、同時に、英文を参照して直接翻訳した痕跡がみられるという。なお奈倉次郎によってディキンソンの翻訳として全訳が刊行されるのは 1925 年のことである。これら日本での受容については別稿を用意しなければならないだろう。

30） Forster, *Goldsworthy Lowes Dickinson*, p.146, p.151.

31） 植原悦次郎の案内で富士登山を果たすといったディキンソンの日本旅行の詳細は、すでに宮本盛太郎『来日したイギリス人』（木鐸社、1989）の第 2 章に詳しい。

32）『岡倉天心全集』別巻、pp.233-234.

33）『岡倉天心全集』7 巻、p.289.

34） G. Lowes Dickinson, *An Essay on the Civilisations of India, China & Japan* (London: J.M. Dent, 1914), p. 7.

35） 例えば Mary M. Lago (ed.), *Imperfect Encounter: Letters of William Rothenstein and Rabindranath Tagore, 1911-1941* (Cambridge: Harvard University Press, 1972), pp. 190-191 にあるタゴールの 1915 年 2 月 18 日付書簡を参照。

36） Hay, *Asian Ideas of East and West*, p.63.

37） フォースターによれば ‘League of Nations’ という言葉と発想は、ディキンソンに多くを負っているという。Forster, *Goldsworthy Lowes Dickinson*, p. 163.

38） Forster, *Goldsworthy Lowes Dickinson*, p. 154.

39） ‘East and West’, *Nation and Athenaeum*, November 26 (1927), p.322.

40） この著作は Arthur Huck, ‘A Note on Hwuy-Ung’s Letters from Melbourne, 1899–1912’, *Historical Studies: Australia and New Zealand*, 9 (1960), pp.315-316 が刊行されるまで、オーストラリア在住中国人の記録として考えられていたという。

41）『吉田健一著作集』22 巻、集英社、p.38.

［図版出典一覧］

図 1　*Letters from John Chinaman* (London: R. Brimley Johnson, 1901) 表紙

図 2　E. M. Forster, *Goldsworthy Lowes Dickinson* (New York: Harcourt, Brace, 1934) の p.234 と p.235 間の写真

（文学研究科准教授）

SUMMARY

Goldsworthy Lowes Dickinson' *Letters from John Chinaman* (1901) and Its Appropriation in Asia

Yorimitsu Hashimoto

At the outbreak of the 'Boxer Rebellion' in 1900, Goldsworthy Lowes Dickinson (1862-1932), fellow of King's College, Cambridge, criticised the barbarism in the name of the Western civilization and presented the idealistic view of China, culturally and economically self-sufficient pastoral utopia in *Letters from John Chinaman* (1901). The book was published anonymously but unpredictably it was considered as the real letters written by a Chinese official, especially in America. Actually an eloquent Chinese minister Wu Tingfang had contributed similar polemic articles to the magazines and Democratic Party presidential candidate William Jennings Bryan, possibly misunderstood that they were Wu's propaganda, published *Letters to a Chinese Official* (1906). Civilised or enlightened intellectuals from the East, due to their outspoken activities, had already gone beyond the idealised 'Bon sauvage' in the 18th century philosopher's works. In British context, Wen Chin, pseudonym of Lim Boon Ken, published the *Chinese Crisis from Within* (1901) and criticised the double standard of the civilizing mission in China from the standpoint of a British subject in Singapore. The irony is that Dickinson's letters were the most radical, influential and universal, because his thought was rooted in the tradition of opposition from within. In Indian context, Tagore and Gandhi had felt deep sympathy for what anonymous Chinese mandarin condemned the Western civilization for hiding imperialism. Interestingly Rabindranath Tagore and Kakuzo Okakura, Japanese art historian and philosopher, also believed that Dickinson's *Letters* was genuinely written by a Chinese intellectual. Possibly inspired by the *Letters*, Tagore and Okakura exchanged and developed the idea of Asian unity against Western civilization. Dickinson's criticism of the barbarism of Western civilisation seems to be a typical instance of Orientalism, but its self-criticism and the path to an alternative civilisation it offers could work even now when civilisation has swept away or blurred the boundary between the East and the West.